

再読 梅棹忠夫著『知的生産の技術』（1969） ～情報時代の先見性と時代の制約～

綾 皓二郎

Email: aya@isenshu-u.ac.jp

石巻専修大学 理工学部基礎理学科（石巻市南境新水戸1）

◎Key Words： 知的生産，京大型カード，情報教育，日本語の機械処理

1. はじめに

梅棹忠夫(1920年6月13日—2010年7月3日)著『知的生産の技術』(岩波書店, 1969)は, まだコンピュータが一般的ではなかった時代に知の技法の方法論を示した名著とされる。同書で梅棹は, 知的生産とは知的情報の生産であり, 将来情報産業の時代が必ず来るであろうことを予見している。また, 情報時代の新しい教育についても論じている。彼は知的生産の効率を高めるために日本語を, 表音文字を使ってタイプライターに載せることを実践した。この報告では, 現在の視点から同書を再読し, 彼の先見性と論理, 時代の技術的制約を検証する。併せて, 立花 隆『「知」のソフトウェア』(講談社, 1984)を取り上げて, 梅棹と立花の主張を比較して論じる。注: 以下の原文の引用では, 原文を尊重して表記の統一はおこなっていない。

2. 『知的生産の技術』の時代背景

『知的生産の技術』が執筆された1960年代は, 高度経済成長期の後半であり, 大学進学率が20%に達しようとする時代である。大学における一般教育の在り方が問われ, 60年代後半は大学紛争が激化した時期でもあった。他方で, 情報技術はまだ黎明期で, ワードプロセッサやコンピュータが一般に普及するのは, 20数年後を待たねばならなかった。このような時代背景の下に, 同書が教養主義を標榜する岩波新書の1冊として刊行された。この後には, 同書には述べられてない「日本語の作文技術」などの知の技法が数多く著述されることになる(表1)。

3. 『知的生産の技術』の方法論

知的生産の技術は, 情報の時代を将来迎えるであろう(当時の)現代人の実践的素養として位置づけられている。本書は, 次の11章から成り立つ:

- 1 発見の手帳
- 2 ノートからカード
- 3 カードとそのつかいかた
- 4 きりぬきと規格化
- 5 整理と事務
- 6 読書
- 7 ペンからタイプライターへ
- 8 手紙
- 9 日記と記録
- 10 原稿

11 文章

おわりに

ここでは, 情報教育論, カード, 読書, タイプライター, 日本語表記の問題に限定して, 彼の思想と技術を, 同書の前後の著作を含めて検討する(表1)。

3.1 情報時代のあたらしい教育

彼は『情報産業論』(1963)(表1-文献12)を踏まえ, 今日の情報社会の到来を予見して, 情報時代のあたらしい教育についても述べている。すなわち,

- ・コンピュータのプログラムのかきかたなどが, 個人としてのもっとも基礎的な技能となる日が意外にはやくくるのではないかとかんがえている。
- ・国語と国文学はまったくべつの教科とかんがえては, どうだろうか。
- ・国語の問題はむしろ情報工学の問題としてかんがえ, 大学に情報工学なり言語工学なりの学科をつくり, その出身者が担当するようにする。
- ・情報の生産, 処理, 伝達について, 基礎的な訓練を, 小学校・中学校のころから, みっちりとしこんでおくべきである。
- ・知的生産技術の教育は, 「情報科」というような科目をつくって, 総合的・集中的な教育をほどこすようになるのではないか。

2003年に始まった高校の「情報科」教育は, コンピュータを用いた情報活用能力と情報モラルを育成することを柱としており, 梅棹の考えた広い意味での情報教育とは理念と内容がかなり異なっている。初等中等教育では, 2008年の学習指導要領において初めて言語活動の充実を挙げ, 各教科等を貫く重要な改善事項としている。なお, 大学に情報工学科ができたのは, 同書出版の翌年1970年であるが, 梅沢のいう領域をカバーするものではなかった。

3.2 京大型カード

B6判のいわゆる京大型カードは, 記憶するかわりに記録するものである。カードは, 豆論文を執筆する気持ちで, 他人がよんでもわかるように, しつかりと完全な文章でかく。カードを外部に目にみえる形で操作(くみかえやならびかえ)することによって, 脳の内部の作業の進行をたすけよう, というのである。

3.2 京大型カード

京大型カードによる情報整理法は一世を風靡するほどに流行したが(表1-文献15), 挫折した人が大半ではなかっただろうか。同書で提案されているカー

ドによる情報整理の技術は、今日ではそのすべてが、たとえば Evernote を活用することにより実現できる。一つの記事、「ノート」が一枚のカードに相当する。さらに、京大型カードではできない新聞記事や Web ページ、画像、音声など、情報の大きさと種類を問わず記録できる上に、蓄積された記録の検索も容易である。しかもすべての情報がインターネット上のサーバーに保存され、パソコンやスマートフォンなど、どのデバイスからも利用できる。

3.3 読書

本というものは、内容の正確な理解のために、はじめからおわりまで全部よむことが必要である。カードには、本の要約ではなくて、読み手にとって「おもしろい」ことがらを書くとしている。ひろいよみとかは、本によみかたとしては、ひじょうにへたな、危険で非能率的なよみかたであると述べている。

しかし、現在のような情報爆発の時代にあっては、梅棹流の読書法だけでは知的生産は難しくなっているのではなからうか。

3.4 ペンからタイプライターへ

日本語をタイプライターにのせるというのは、日本における知的生産の技術として、もっともたいせつな問題であるといわなければならないと力説する。

梅棹が日本語タイプライターの開発に執心したのは、日本語をいかにして機械にのせ、知的生産能力を高めるかであった。そのためには、当時の技術では、また彼の日本語観では、表音文字の体系を採用しなければならなかった。理想のタイプライターはひらかなとカタカナのコンビネーションであり、これを解決すれば大発明であるとして、1974年には電動式のカナかなタイプライターの試作までこぎつけた(表1-文献14)。なお、この開発は“タイプライターという機械をつかって日本語をかくのが目的であって、ローマ字やカナモジをつかうのが目的ではない。できることなら、いまの漢字かなまじり文を、そのままタイプすることができれば、それにこしたことはないのである。それができないから、苦勞するのである”といっている。

3.5 日本語表記の問題

梅棹は、彼の著作では送り仮名の不統一の問題を解決するために、「訓読の用言においては漢字を使わない」という表記法を実践している。漢字かな交じり文では、漢字の音訓二とおりのつかいわけとおくりがなの規則がさだまっていないので、漢字の訓はやめて音だけにしてしまうのである。こうすれば、送り仮名の不統一の問題は解消し、日本語表記の混乱が改善される(表1-文献13)。

しかし、送り仮名の問題は解決しても、別の大きな問題を引き起こしていることには配慮しない。

・梅棹はわかりやすい文章になったと自賛しているが、この表記法ではひらがなが多い文章となって、読みにくく分かりやすいとはいえない(同書での漢字の使用率は20%程度であるが、本人はこれでもまだ漢字が多いといっている)。特に知的生産に関わる文章で、用言には訓読を用いない書き方は、文の落ち着きがきわめて悪い。たとえば、著作集18巻の

『日本語と文明』に、日本語の正書法に関して次のような文章がある(p.515)。(漢字には訓があるため、おくりがなが一定しないので)“日本語としての正書法がきまらないのである。したがって、日本語のただしきかたを一義的に決定できない。”この文章は、“日本語としての正書法が決まらないのである。したがって、日本語の正しい書き方を一義的に決定できない。”と書いた方が、読みやすく分かりやすい(注:下線は原文にはない)。梅棹の表記では、

- ・訓読みを含めて漢字を用いないので、速読ができない。読み誤りが起きる可能性が高くなる。
 - ・表記がかえっておかしくなる。
- 読点を多用しなければならない。本来カタカナを用いない箇所でも識別性のため、カタカナで書かねばならない。ときには、傍点を必要とする。
- ・科学・技術の日本語で、事物の分析や伝達がいまいになる。
 - ・訓読みを廃止するので、漢字語は符牒になってしまう。さらに漢字語が崩壊してしまう恐れがある。
 - ・訓読みをやめることが、子どもの漢字教育に適切かという問題も生じる。

鈴木孝夫は、日本語の正書法と送り仮名の問題に関して“日本語は漢字仮名交じり文という性質と、漢字の音訓両読という特殊性のため、画一的な正書法が本質的にできない、そして必要のない言語なのである。送り仮名を統一しなければと考えるのは、現代哲学という擬似問題の一つであって、画一的な答えの出ない、画一的な答えを出す必要のない問題を立てて、(梅棹が)勝手に苦しんでいるとか私には思えない”と述べている(表1-文献8)。

本多勝一は“送りがなというものは、極論すれば各自の趣味の問題だと思う。ひとつの法則で規定しても無理が出てくる”といっている(表1-文献9)。

4. 「かな漢字変換」による日本語処理

4.1 情報処理技術者による日本語処理の取り組み

情報処理技術者は日本語の機械処理に決して無関心であったわけではない。情報処理学会の創立総会(1960年)の講演で、和田弘博士は“計算しかできない計算機はゴミ。これからは文字を含めた情報を処理させていく”と宣言し、『計算をしない計算機』という論文では、文字を読む機械、外国語の翻訳、要約機、検索機について展望している。⁽¹⁾

コンピュータに漢字を扱わせたいという要求に応えるべく、1960年代前半から「かな漢字変換」の研究は進められており、遂に1978年に東芝が日本語ワードプロセッサ(ワープロ)の商品化に成功する(情報通信技術の発展については表1を参照)。⁽²⁾

現在、日本語かな漢字変換ソフトは、日本のあらゆるコンピュータや携帯電話などの情報機器に搭載され、それらの日本語処理機能として広く利用されている。漢字はコンピュータに載ったことにより、コンピュータ/インターネットと一蓮托生の関係になり、その存続を疑う者はいなくなった。⁽³⁾⁽⁴⁾

4.2 梅棹の日本語ワープロ観

梅棹は、ワープロは「かな漢字変換」・編集・記憶・

印刷の諸機能をもつことによって、単なるタイプライターとはまったくべつものの、まさに知的生産のためにつかえる機械として登場したことは認めるものの、“現在市販されているワープロが、われわれ知的生産者にぴったり適合したものであるとっているのではない”と釘を刺した(著作集第11巻)。

梅棹は、ワードプロセッサがもつ作図・作表・計算機能は、知的生産には必要ない。日本語の正書法の確立などは、かえってワープロの出現によって、とおのいてしまったと述べる。さらに、漢字変換はワープロにとっては枝葉末節のこととし、ワープロをワープロたらしめるために、「かな漢字変換」をやめることを提案したのである(表1-文献14)。

梅棹は、日本語ワープロの使用によって難しい漢字を用いる文がむやみに増えていることを警告し、ワープロが日本語表記の平明化を反動的に妨げているとして、これを「ワープロ反動」と呼んだ。しかし、これは事実と反し、梅棹の思い込みにすぎない。現在では一つの文書における漢字使用率は、読みやすいとされる30%~40%の前後で安定しており、漢字かな交じり文は現代日本語の表記法として完全に定着している。

4.3 日本語ワープロの成功の文明論的意味

日本語ワープロの開発は、漢字かな交じり文の日本語文書を自由に作成したいという日本人の長年の夢を実現しただけにとどまらず、中国など他の国の自然言語処理システムの開発に大きな影響を及ぼし、地球規模の情報社会への進展に大きく貢献した。これにより、東芝の日本語ワープロはIEEEのMilestoneに認定された(2008年)。野村雅昭は、“(日本語ワープロの)開発された技術が日本国内でおおきな恩恵をもたらしたとしても、人類の文明の発展に、どれだけ貢献をなしたかという発想はない”としているが、⁽⁵⁾それは認識不足も甚だしい。

日本語ワープロ(ソフト)の開発により、“文字を使ふといふことは、機械に制限されて使ふのではなくて、機械がもし必要ならば、その文字の实情に應じて、新しい機械を發明することが必要であります”(表1-文献2)という主張が実現をみたのである。

日本語ワープロ成功の言語文明論的意味は、日本語において漢字制限を不要にし、自然な日本語が機械で扱えるようにして、日本語の文書を機械で書き、編集し、伝達する知的生産の方法を確立したことである。これにより、

- ・日本語文書の作成および事務処理の効率が飛躍的に高まった。
- ・表音文字だけでは決して得られない、多様で豊かな日本語表現が機械で可能となった。
- ・多数の普通の日本人が日常的に文章を書き情報を発信する文化をつくるのに多大な貢献をした。

5. 梅棹の日本語ローマ字化論と文明の盛衰

梅棹は、文字による情報の伝達は文明を支えるもつとも基本的な条件であるが、漢字かな交じりの日本語の文字システムは、日本文明(科学あるいは技術、さらに経済、社会制度など)を運轉(梅棹のコ

トバ)してゆくためにはきわめて不都合であるという。今日の日本文明においてもちいられている「漢字かなまじり」という表記システムは、日本語に多くの混乱と非能率をもたらしている。

現代は情報の時代であり、情報の質と量とスピードが現代の文明の盛衰を決定するが、漢字かな交じりの日本語では情報量の急速な増大と複雑化に対応できないというのである(たとえば、漢字かな交じりの日本語では検索のスピードが欧米語と比べて遅すぎることをあげている)。この不合理きわまる表記システムでは、情報の質と量において競争に勝つことはむつかしく、日本文明は21世紀には衰退の道をたどるおそれがあるという(表1-文献13)。

漢字を全廃しローマ字を使用する日本語表記システムを採用し正書法を確立すれば、日本の文明を効率よく運轉し発展させていくことが可能になるという彼の説には疑問が多い。たとえば、日本語をローマ字化しても正書法の問題は解決しないことに注意すべきである。なぜなら、

- ・ローマ字の規格に、日本式、訓令式、ヘボン式、99式とか、亜流を含めれば10種類近くあり、綴り方を統一することはできない。普通の人は、これらの方式をちゃんぽんに使っている。
- ・ローマ字の分ち書きの方式にも数種類あり、これを実際に統一することは容易ではない。

ローマ字論者はローマ字表記にすると日本語の入力効率が高まるというが、上記の点を考えると、ローマ字書きしても、表記の混乱をなくすには、ローマ字→ローマ字変換、英語→ローマ字変換、分ち書き変換、スペルチェックなどが必要となり、入力効率は、彼らがいうほどには高くはならない。

日本語の効率は、単に文字を入力する・検索する効率だけでなく、読む・考える・書く・編集する効率も考えなければならない。情報の競争に勝ち抜くため、入力や検索の効率という視点のみから、日本語のローマ字表記を主張するのは間違いといえる。梅棹の漢字廃止論・日本語ローマ字論は、日本語という言語システムの部分と全体のバランス、利害得失のトレードオフを考えていない。

以上から、日本が日本語の表記システムにより情報の国際競争に敗れるという梅棹の論理には飛躍があることが分かる。

大野晋は、漢文訓読体は日本人の文明に向き合おうとする意志力によって維持されてきたと述べている。言語を単なる道具と見て、取り替えたり、削ったりすることは、日本の文明力の崩壊に繋がることを指摘している。⁽⁶⁾

6. 立花隆『「知」のソフトウェア』の方法論

ジャーナリストの立花は、『「知」のソフトウェア』で、自らの個人的体験から得た、梅棹とは対照的な知的生産の方法論を述べている。

6.1 立花の基本的な考え方

- ・知的生産の方法論は一般論が成り立たない分野である。自分で自分の方法論を発見しなさい。(立花を含めて)他人の方法論に惑わされてはならない。

- ・知的生産では、無意識下の記憶能力・思惟能力を活用すべきである。
- ・資料の整理と保存にかかる手間と時間は少なければ少ないほどよい。
- ・個人的情報整理では他人の利用など考えずに100%自分専用であってよい。

6.2 京大式カード、こざね法 (KJ 法に含まれる)

- ・役に立たないので、やらない方がよい。早くやめてよかった。
- ・思考にカードやメモ用紙の物理的操作は不要である。意識内作業であったものを物理的作業に置きかえても能率がガタ落ちするだけである。
- ・考えるということは本来個人的になされるべき作業であって、これを KJ 法 (表1-文献5) のように集団化してもメリットはない。

ここで、KJ 法はコンピュータにも向かないことを指摘しておく。なぜならディスプレイでは KJ 法で必要な一覧性が得られないから。KJ 法は、企業では発想のためというよりは、参加意識の強化などの社員教育の一環として用いられていた記憶がある。

6.3 読書

- ・本というのは、1 ページ目から読み始めて、最後まで読むものだというような固定観念は捨てることである。必要などころ以外は読まないでよい。情報が氾濫する現代社会においては、積極的に拾い読み、飛ばし読みするスキルを身に付けることが必須である。ペナックは、読者の権利として、飛ばし読みする、最後まで読まない、あちこち拾い読みする権利などを挙げている。⁽⁷⁾

梅棹の著作にも始めから終わりまで読まなくてよいものがある。日本語と文明に関する論考 (著作集第18巻など) には、自説と他者の説を比較して議論がすることがほとんどなく、同じ主張の繰り返し多すぎる。

7. おわりに

梅棹は情報の時代を予言した知の巨人であったが、他方で日本語ローマ字化論を終生主張し続けた。彼は、国語国字の問題に熱心な人には、しばしばファナチック (fanatic) な傾向がみられるといている。中牧弘允 (国立民族学博物館) は、著作集第 11 巻『知の技術』のコメント 1 で、情報の時代を先見した梅棹忠夫は、知の技術のアバンギャルドであり、煽動家でもあったと指摘している。同感する読者が多いのではなかろうか。

参考文献

- (1) 和田 弘：“計算をしない計算機” 情報処理 1(1), pp.11-15,(1960)
- (2) 天野真家, 森 健一：“漢字・日本語処理技術の発展：日本語ワードプロセッサの誕生とその歴史” IPSJ Magazine Vol.43 No.11, pp.1217-1225 (2002)
- (3) 阿辻哲次：“漢字と日本人の暮らし”大修館書店 (2010)
- (4) 安本美典：“漢字の将来” 言語生活 Vol.137,pp.46-54 (1963)
- (5) 野村雅昭：“漢字の未来” 筑摩書房 (1988); 新版, 三元社 (2008)
- (6) 大野 晋：“日本語の教室” 岩波書店 (2002)
- (7) ダニエル・ペナック：“ペナック先生の愉快的読書法—読者の権利 10ヶ条” 藤原書店 (2006)

注：梅棹忠夫の著作について

『梅棹忠夫著作集』(全 22 巻 中央公論社 1989-93 年) がある：第 11 巻 知の技術, 第 14 巻 情報と文明, 第 18 巻 日本語と文明。情報産業論の原典は、梅棹忠夫：“情報産業論—きたるべき外胚葉産業時代の夜明け”, 放送朝日, 第 104 号, pp.4-17, 朝日放送 (1963)

である。

表1 知的生産に関する方法論の書籍と関連する情報通信技術など

年代	著者	書籍 (文献)	情報通信技術など
1950	清水幾太郎	1 論文の書き方 (1959)	NHK, 民間のTV放送 (1953)
1960	福田恒存	2 私の国語教室 (1960)	情報処理学会 (1960)
	加藤秀俊	3 整理学—忙しさからの解放 (1963)	IBM 360 (1965)
1960	梅棹忠夫	4 情報産業論 (1963)	東大大型計算機センター (1965)
	川喜田二郎	5 発想法—創造性開発のために— (1967)	JIS 8ビットコード (1969)
	梅棹忠夫	6 知的生産の技術 (1969)	UNIX, ARPNET (1969)
1970	加藤秀俊	7 自己表現 文章をどう書くか (1970)	インテル MPU4004 (1971)
	鈴木孝夫	8 閉ざされた言語・日本語の世界 (1975)	JIS 漢字コードの制定 (1978)
1980	本多勝一	9 日本語の作文技術 (1976)	東芝 日本語ワープロ (1978)
	木下是雄	10 理科系の作文技術 (1981)	常用漢字表の内閣告示 (1981)
	立花 隆	11 「知」のソフトウェア (1984)	NEC PC980 (1982)
	梅棹忠夫	12 情報の文明学 (1988)	ワープロソフト 一太郎 (1985)
	梅棹忠夫	13 日本語と日本文明 (1988)	商用インターネット (1988)
	梅棹忠夫	14 日本語と事務革命 (1988)	携帯電話 (1987)
1990	阿辻哲次	15 知的生産の文化史 (1991)	MS Word95 (1995)
	野口悠紀雄	16 「超」整理法 (1993)	Google (1998)